慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 憐憫から卑怯へ : プルースト的倫理学についての一考察 |
| Sub Title | De la pitié à la lâcheté : une étude sur l'éthique proustienne |
| Author | 大嶌, 健太郎(Oshima, Kentaro) |
| Publisher | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 |
| Publication year | 2022 |
| Jtitle | 慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.75 (2022. 10) ,p.143- 163 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20221031-0143 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／This content is protected by the Japanese Copyright Act 

# 憐憫から卑怯へ
## ――プルースト的倫理学についての一考察――

大　嶌　健太郎

2008 年から 2009 年にかけてアントワーヌ・コンパニョンは、コレージュ・ド・フランスにて、「プルーストのモラル」と題されたセミナーを主宰した。登壇者たちのすべての講演は 2010 年、Cahiers de littérature française の 9 巻と 10 巻にまとめられ出版された[1)]。主催者コンパニョンの述べるように、いずれの論者も例外なくプルースト作品における倫理的・道徳的言説の多様性と重層性、あるいはその複雑さを浮き彫りにしている[2)]。ゆえにこれらの研究のたどりつく結論は、「見出された時」から導き出される、芸術家のための美学の確認でもなければ、特定の道徳的教訓を読み取ろうとするのでもない。プルースト的倫理学の独創性とは、日頃はわれわれが疑いもせず常識としている道徳的判断あるいは道徳的行動の妥当性を揺るがし、人生を安定的に送るうえで欠かせないさまざまな倫理的諸価値について再考するよう、各々の読者に促すのである。それは読者を不安に陥れることもあるが、より自分らしく生きたり、他者との生活をより良くするための勇気づけにもなるだろう。

この画期的な一連の研究に先立ちコンパニョンは、2003 年に、「語り手の道徳的センス」という論文を発表していた[3)]。そこでは、実人生における道

1）*Morales de Proust, Cahiers de littérature française*, n° IX-X, dirigé par Mariolina Bertini et Antoine Compagnon, Bergamo, L'Hartmattan, 2010.

2）*Ibid*., p. 13.

3）Antoine Compagnon, « Le "sens moral" du narrateur » in *Proust et la philoso-*

徳と倫理の在り方を提示する『失われた時を求めて』の、それまでプルースト研究者からは注目されてこなかった側面に焦点があてられ、その一例として、「囚われの女」におけるヴェルデュラン夫人主催の音楽夜会のある重要なシーンが、綿密に分析されている。そこで特に問題になるのは、あまりの傍若無人ぶりから女主人の不興を買い、恋人モレルとの仲を引き裂かれたあげく遂にはサロンから追放されるシャルリュスの悲劇と、それをめぐる語り手＝主人公の行動と心理である。著者によれば、このシーンは、「『失われた時』において実践道徳学として現れる模範的なケースであり、その問題は純粋[4)]」なのだそうだ。というのもこのシーンでは、「恋愛も嫉妬も一度も介在することなく、人間的連帯に関する考察はしたがって情念によってゆがめられていない[5)]」からである。自身の処罰計画が進行していることを知らないシャルリュスは、主人公のプチ・ブルジョワという身分を侮辱するが、当の主人公は、貴族的特権を笠に着る男爵の傲慢を憎むことができず、おのれの名誉心の弱さと復讐精神の欠如を痛感する。しかし、正義の名のもとに不正を憎むなどということはしょせん、社会生活を営む過程で教育によって身につけられた、つまりは、外部から押しつけられた道徳的価値観によって誘発される習慣にすぎないのではないか。普段は浮上しないものの根底に潜みつづける、より強固な性質はむしろ、祖母から受け継いだ名誉心の欠如であり、弱きものへの共感と憐憫のほうなのではないか、と語り手は問う。主人公は、社会的には弱点とみなされる名誉欲の欠如や不道徳への共鳴の意義をおそらくはドストエフスキーの小説からすでに学んでおり、自己の心性を最も強く特徴づけているのはこれらであると実感していた。彼にとってこのロシアの小説は、祖母から受けついだ本来の自分自身に立ちかえるとともに、他者への憐みという普遍的感情の美質を確認する契機となったのである。文学——

---

*phie aujourd'hui*, actes d'un colloque tenu à Gargnano del Garda, Italie, 28–30 setptembre 2006, sous la direction de Mauro Carbone et Éléonora Sparvoli, Pisa, Édition ETS, 2008, p. 191–206.

4）*Ibid*., p. 195.

5）*Ibid*.

例えばドストエフスキーの小説――は、自己の道徳観を改めて問い直し、真の自我を発見するに至らしめる。以上を踏えてコンパニョンは、このような道徳的体験を文学が提供しうることを、このシーンは示していると結論づけている。

フィリップ・シャルダンもまた、正義の名において道徳的判断を下すという通俗性からプルースト作品が完全に逃れている理由の一つを、他者への憐みという感情をめぐる作家独自の考察と描き方のうちに見て取る[6)]。コンパニョンと同じく、シャルリュスの断罪シーンに着目するシャルダンは、本来はより人間的な感情の発露であるはずの憐みの心が、名誉心や正義感、不正を憎む義侠心といったいわば社会通念と化した「道徳的センス」に対する無関心として描かれていることに興味を示す。われわれの自然な感情生活が、常識として社会から課される道徳規準の埒外で営まれ得ることを示した『失われた時を求めて』は、シャルダンの言うように、脱道徳な作品でもあるのだ。

両者の研究によって明らかにされたのは、プルースト作品における憐みというテーマの重要性と、それについてのアプローチ方法の独創性と言えるだろう。憐みというテーマは、主人公の本性を説明するばかりか、『失われた時を求めて』を通俗的道徳観念から引き離し、われわれ読者の日常生活の安定性を揺るがしうる実践的倫理学の書たらしめる要素なのである。本稿は、これらの研究の方向性を共有するものであり、プルーストにおける重要テーマである憐みの心に焦点を絞り、道徳的実験の場としての『失われた時を求めて』の意義をさらに追求してゆきたい。第一に、憐みは人類普遍の感情であり美徳でさえあるにもかかわらず、現実には一過性の感情にすぎず、個々のエゴイズムがつきまとうなど、卑俗な形態をとらざるを得ないこと示す。第二に、他者への配慮であるところの憐みが実は、想像力の働きであるかぎりにおいて人の心を見誤る危険をはらみ、限界を有しているのではないかという問題提起を行う。最後に、憐みの限界を知ることは、弱きものをくじく

6）Philippe Chardin, « Amoralités proustiennes », *op.cit.*, p. 27–39.

不正や悪意を理解するための一歩になりうるかもしれないという展望を示したい。

## 1. 憐憫の本質

### 言うに易く、行うに難し

プルーストにおける憐みを分析する前段階として、それとははっきり区別される、日常的に誰もが行うであろうある言動の欺瞞について述べておきたい。それは、他ならぬ、憐みを表現することである。真の憐みとは言えないこの言動はしかし、社会生活を円満に営み、他者との関係を良好に保つすべでもある。

> この人たち（われわれが知っている人たち）を悲しませることがおきても、われわれはそれを、なにかを鑑賞するかのように認知するだけなのだ。適当な言葉でもってこちらも哀しみを表明できてしまうがために、われわれが善良な心の持ち主であると印象づけはするものの、その人たちに到来した悲しみを心から感じ取っているわけではないのである[7)]。

憐みとは、社会生活におけるいわばマナーとは異なるのだ。社会生活よりも精神生活を、社交よりも孤独を、会話よりも創造を優位におくプルーストはここでも、他者との日常的交際のなかに溶け込んだ憐みの一形態、つまりは、憐みを表現するための言葉の欺瞞を見抜く。それは他者の苦しみを癒す配慮には違いないが、共感とは程遠い。ゆえに、友情への懐疑を抱きつづけたプルーストならではというべきか、アルベルチーヌの出奔で悲嘆にくれる主人公になげかけられるサン＝ルーの憐みの言葉のなかにも、他者の心情についてのまったき無理解を読みとっている。

---

7）Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, édition de Jean-Yves Tadié, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », quatre volumes, 1987–1989, t. III, p. 757. 以下、各篇のタイトルを略記し、巻数と項数をこれに付記する。

> ロベールと私は互いに嘘をつきあっていたのだ。失恋のどん底にある友と、そんな彼を助けたいと誠実に願うもう一人の友とがかわすすべての対話がそうであるように。助言を与え心の支えとなってやったり、慰めてやったりする友は、相手の失意に対する憐れみを表にだすことはできるが、その失意を実感することはできないために、相手にとってよかれと思えば思うほど嘘を言うはめになる[8)]。

これには、社交や友情という、個人の真情が度外視されがちな生活圏に対するプルーストの批判的視線の他に、内発的な道徳感情と、道徳的価値を言葉や行動で実現することとを明確に区別する姿勢が深く関係しているのかもしれない。

> 私たちの美徳自体、あたりにふらふら飛び回っているようなものでなく、常にこちらの手に届くところにあるわけではない。美徳はいつのまにか私たちの頭のなかで、ある特定の諸行動とあまりに堅く結びつくに至り、そんな私たちにとって美徳の実現とは、そうした行動に際してのみ生じる義務になってしまっている。ゆえに、別の種類の活動をする機会がめぐってきたとしてもこちらは意表をつかれてしまい、この活動がまったく同じ美徳の実現を含意しているなどとは思いもよらない[9)]。

作家によれば、人はふつう、美徳そのものではなく、美徳とみなされるふるまいを実行することに重きをおく。他者への憐みを表す言葉の数々を並べ立てたからといって、それは社会規範に則って自らに課している義務ゆえにすぎないのかもしれない。

### 人間的、されどもっとも遠い美徳

それでは、プルーストがそうと認める憐みとはどのような感情なのだろう

8）*AD*, t. IV, p. 25.
9）*DCS*, t. I, p. 424.

か。はじめに、恋人アルベルチーヌに主人公が感じた憐みの情を分析したい。コンパニョンの言うように、恋愛関係のなかにあっては情念が当事者たちを支配しており純粋な道徳的感情の発露は困難であるが、以下に見るシーンでは例外的に、主人公のうちに恋の情熱を超越した温和な人間的感情が芽生えている。舞台は「ソドムとゴモラ」における二度目のバルベック滞在中のこと。ダンスホールでアンドレと身を寄せ合いダンスをするアルベルチーヌに、医者コタールの余計なおせっかいも手伝い、レズビアニスムの疑惑がはじめて生じる。これを受けて、主人公は彼女に対し、本心ではアンドレを愛しており、彼女自体にはもう無関心になっていると嘘をつく。そのうえで、彼女のせいで引き起こされた苦しみに終止符をうち、アンドレへの愛を確かなものにしたいなどという無理な希望を表明する。自らの身勝手と不機嫌にも従順な態度を見せるアルベルチーヌに対し、彼は次のように反応する。

> 自分の恋とともに、彼女（アルベルチーヌ）とは何の関係もないある慢性的狂気をいったん消し去り、彼女の身になってみた私は、この純朴な少女を前に同情を禁じえなかった。［…］純粋に人間的なものの見方、つまりは、私たち二人の関係の埒外にある観点に立ってみると、そこでは私の嫉妬深い恋心など死滅しており、だからこそ私はアルベルチーヌに対してこのような深い憐れみを抱いたのである。その憐れみも、かりにアルベルチーヌを愛したことがなかったならば、ここまで深い憐れみとはならなかったろう。［…］後になって女性に対するこれまでのふるまいをすべて振り返ってみてしばしば気づかされるが、自分の愛を見せつけたい、愛されたい、愛のあかしを得たいなどといった欲望からくる行動よりも、純粋に道徳上の義務から、つまり自分の恋などなかったかのように、愛する人に対して犯した過ちを償おうとする人間的欲求からくる行動のほうが、ほとんどの場合、大きな位置を占めているのである[10)]。

10）*SG*, t. III, p. 226.

すでに常態化しつつあり亢進もしている嫉妬心から語り手が一時的に解放されているだけとはいえ、純粋に人間的な優しさが恋人との全感情生活のなかで大きな位置を占めていることにプルーストが決して無頓着でなかったこと自体とても興味ぶかく、この点は、支配欲と憎悪といったプルースト的恋愛の主要素とは相いれないようにみえる。「彼女の身」になると同時に、「純粋に人間的なものの見方」に立ち返り恋人をいたわろうとする「人間的欲求」としての憐憫。プルーストは、この感情が人間的であること、つまり、人間一般に遍在する感情であることを強調する。アルベルチーヌとの個人的な関係や私利私欲から脱して、一個の普遍的な存在に回帰することこそ、憐憫の情を抱くということなのである。一点注意が必要なのは、プルーストが使っている「道徳上の義務」という言葉だろう。これは、前述したような、しかるべきときに実行に移すべき行動とは異なる。主人公は、アルベルチーヌの表情と態度を見て「こらえきれずに」、「母にキスをする時と同じような喜びをおぼえながら」、つまり、ごく自然発生的な欲求の芽生えから彼女を抱擁しているのであり、これは、予め定められた法を順守するにすぎない外発的行動ではない。この種の憐憫を正しく理解するためには、ベルゴットの死に際して展開される道徳的義務に関するプルーストの考察を参照するのが有益であろう。善意や良心の咎め、細やかな心遣いといった義務は、現世でそれを果たしたからといって報われることはない、「この世とはまるで異なる世界」に属する掟にほかならず、にもかかわらず人がそれに従うのは、「誰によってそうされたかは分からないが、その教えが私たちの心のなかに刻み込まれているから[11]」なのである。人が無意識のうちに体現する美徳こそが真の美徳であるというわけだ。

次に、「ソドムとゴモラ」の「心の間歇」に移り、主人公の、フランソワーズに抱く憐憫の情を見てみたい。一度目のバルベック滞在の終わりにロベールの好意で写真撮影をしたときにはすでに祖母が病魔に侵されていたことをフランソワーズの口からはじめて聞かされた主人公は、涙をこらえきれ

11）*LP*, t. III, p. 693.

ず、このデリカシーのない女中を外に追いやる。それと同時に、過度の感傷癖のあるフランスワーズを思いやり、彼女に憐みの情を抱く。そこで語り手は、女中たちのふるまいはしばしば過剰であったり、道理にかなっていなかったりと理解に苦しむものであるが、そうした「田舎特有の哀切の情」にも心を寄せなければならないと説く。かような寛容の精神を思い起こした彼はついに、フランソワーズの感傷癖を大目に見てやり、また、彼女のアルベルチーヌへの意地悪をも恨むことなく、この老女中を愛するようになる。彼のうちに、「愛情が、確かに間歇的ではあるがもっとも強固な、つまりは、憐憫に根ざした愛情[12)]」が芽生えたのである。アルベルチーヌに対しては、恋情ゆえに深まった憐憫であると述べられていたが、フランソワーズについては、憐憫ゆえにより強固な情愛が生まれている。いずれにせよ、愛情一般と憐憫とは、異なれど不可分な感情ということであろう。ただ、このシーンで新たに読み取るべきことは、憐憫は他者の心を理解するのに有益な感情たりえるという点だ。確かに主人公はアルベルチーヌの身になったからこそ、彼女に憐みを感じたのであり、自分の不当なふるまいに苦しめられる恋人の心理をある程度までは理解していたと言えようが、この小説全体を通して、アルベルチーヌの内面の全貌が語り手に明らかにされることは決してないことは良く知られており、おそらくこの場面も例外ではないはずだ。その証拠に作家は、アルベルチーヌの心理の客観的な分析結果を読者に提示していない。それに対してフランソワーズに見られる「田舎特有の哀切の情」については、その実態が具体例を伴い細かく描かれている。プルーストに従えば、他者の心理をより深く理解させ、他者との共生をより情愛のこもった生活にすることこそ、憐憫という感情の美点にほかならないと言えよう。

しかしながら、このような美点にもかかわらず、あるいはそれゆえに、憐憫の情ははかなくもろい感情なのではあるまいか。アルベルチーヌに憐憫を感じることのできた主人公ではあったが、「人間的な観点」に立てたのはむしろ例外的であり、日常的には個人の利害にがんじがらめになった存在とし

12）*SG*, t. III, p. 174.

て生きなくてはならない。このように、現実生活のなかで憐憫を覚えることは困難であることをプルーストはよく知っていた。憐憫とは、実人生のなかではなくむしろ睡眠中に夢をみながら経験される感情と言ったほうが適切かもしれないのだ。作家によれば、寝ているあいだ人はさまざまな憐憫を心に抱くもので、このような特異な体験は、「覚醒時の冷淡で、しばしば敵意のこもった良識に従えばさっさと忘れてしまいたくなるものの見方、もっと人に優しく、ずっと人間的なものの見方を想い出させてくれる[13]」のだそうだ。このような幸いなる夢を見た後の朝、人はいっとき個我から抜け出し、憐憫の心をもった普遍的存在となりうる。しかしそれはいっときにすぎない。

> フランソワーズに対して憐憫を忘れずにいようとバルベックで自らに誓ったことを思い出した。なのでこの日の午前中だけはせめて、フランソワーズと給仕頭との喧嘩に苛だたないようにしよう、［…］彼女にやさしくしようと努めることができるだろう。ただし、この午前中だけのことだ、［…］人間は、見た夢の想い出にいつまでも支配されることはないのだから[14]。

バルベックでは、憐憫にもとづいているがゆえにより確かな愛情をフランソワーズに抱くことができたなどと、誇らしい道徳的感情を告白していた語り手であるが、実のところそのような憐憫は夢のなかの特殊な心理状態、または疑似体験にすぎず、目覚めた後はわずかなあいだ、例えば「午前中」のあいだしか存続しえない。このように、憐憫は刹那的なのであり、現実のなかでどのように実践されているかという問題に注目したとたん、われわれがいかにそれとは無縁の感情生活を送っているかを逆に示すことにしかならない。

憐憫という感情が完全で純粋なかたちで経験されるのは、夢のなかでなければ、あとは小説を読んでいるときくらいのものなのだ。

---

13）*SG*, t. III, p. 632.
14）*SG*, t. III, p. 632.

この善意は、利害がからむと麻痺してしまい行使されることはない。しかしなおも実在はしており、いかなるエゴイスティックな動機の妨げも受けなくなったとたん、例えばある小説や新聞を読んでいるときなどは、人を殺めたことのある者の心のなかにさえ、善意というのは花開くものなのだ。新聞小説の愛読者としてはいつも優しい彼の善き心は、か弱い人、正しき人、そして、虐げられた人へと寄せられる[15)]。

ここでは「憐憫」という言葉は直接使われておらず、もっと広い意味の「善意」が用いられているが、個人の利害関係から脱して弱者を思いやる感情であるという意味では、憐憫も含意されていると考えられる。ここでもまた憐憫は、実人生から離脱した読書という特別な時間に発生する心理状態として認識されている。しかしここでは、憐憫のさらに別の側面に目を向けなくてならない。殺人者であっても感じることがある、つまり、およそ誰でも感じることができ、新聞小説を読みながら、言い換えれば、望めば毎朝でも体験できるという憐憫は、万人にとって容易な美徳と言わなければならないのでなはないだろうか。事実、プルーストは、欠点なるものが個人によってそれぞれ異なる形態をとるのに対して、美徳は、デカルトの言う良識と同様に「この世でもっとも広くゆきわたっているもの」と言いのける。「人間的な感情」としての憐憫は確かに、実生活のなかで実際に発露することは稀ではあるものの、「人間的」という言葉の意味どおり、万人の心性に普く潜在するきわめて通俗的な善意の形態にほかならないのである。

## 2. 憐憫を試練に賭けるプルースト

### 憐憫の凡庸さ

憐みの通俗性と希少性というパラドックスを踏まえたうえで、「囚われの女」におけるシャルリュスの悲劇を振り返りたい。すでに見たように、主人公が、自分を侮辱してきたシャルリュスになおも憐みを抱きつづけたのは、

15）*JFF*, t. II, p. 100.

自己の尊厳を保ちたいという意志よりも、祖母から受け継いだ本来の性格がまさったからであった。さらに、ドストエフスキーの作中人物のような、「美点のまわりに膨大な悪癖がとり憑いている人物」に対して好感を抱きやすい主人公独自の性向も、男爵への共感を維持するのに役立った。これら彼固有の性格ゆえのまことの憐みはしかし、一時的で脆弱でもある。もともと彼は、ヴェルデュラン一派の悪だくみを知らされていたにもかかわらず、「男爵からヴァントゥイユ嬢とその女友だちの来訪に関する情報を得られるようにしておきたかった[16)]」という自分本位の動機から、会話を長引かせ男爵をサロンに引きとどめよとの指令を遂行するブリショに加担していたのである。それに、アルベルチーヌを長いあいだ一人にしておきたくないというこれまた個人的な理由から、自分一人で暇乞いを申し出る始末である。したがってシャルリュスへの憐みは、主人公の心の中心を占めていたわけでは決してないということだ。そして、「シャルリュス氏が被ろうとしていた苦難を考えただけで私には耐え難いことだった」と感じ始めてからも、「できれば彼に警告してやりたかったが」、「どうすればよいのか分からなかった[17)]」という理由で謀略の進行を放置する。語り手はここではそうと認めていないが、このような態度はほかならぬ卑怯と言ってよい。事実、「スワン家のほうへ」では、大叔母から意地悪をされる祖母に同情を寄せながらも、「苦しめられる人や不正義を前にしてわれわれ誰もがするように[18)]」見てみぬふりをしていた幼少期の自分の態度を、語り手自身、「卑怯」と呼んでいたのだから。

ところで、弱者への憐みは、主人公の場合、後で詳しく見るようにほとんど必然的に、弱者を虐げるものへの嫌悪を引き起こすだろう。このシーンでは当然、ヴェルデュラン夫妻にその反感は向けられる。しかしここでも、彼の態度は臆病のそしりを免れない。ついにモレルから決定打となる攻撃を受けたシャルリュスを目にしつつ、彼は、「シャルリュスがいまにもモレルと

16）*LP*, t. III, p. 790.
17）*LP*, t. III, p. 795.
18）*DCS*, t. I, p. 12.

ヴェルデュラン夫妻をこてんぱに痛めつけるのが見られるだろう[19]」と想像することをせめてもの気休めとする。「これよりはるかに些細なことで、彼の狂気じみた怒りを買ったことがある」主人公には、そう信じるに足る理由はあったのだ。自らは何ら事件に介入しようとせず、事の成り行きをまるで小説を読んでいるかのように傍観あるいは楽観するだけの主人公の態度を臆病と言わずになんと言おうか。小説を読んでいるかのように、というのは単なる比喩にとどまらない。語り手は言っている、「ベルゴットのある小説のなかの、中身をすっかり忘れてしまった幾項かをめくっていると、ある悪人による悪だくみが描かれているのに遭遇する。すると今でも私は、百ページ先まで読みとおし、終盤でこの悪人がこっぴどく辱められ、生きながらえた末に自分の腹黒い策略が失敗したことを思い知るのをしっかり見届けないかぎり、その本をおくことができなかった[20]」と。新聞小説を読む読者はだれしも弱者の味方をするものだと語り手は言っていたが、ここではその逆方向の心理の動きと言おうか、悪人に対する反感、悪人を罰したいという義侠心も、小説を読んでいるときに特有の感情と言えるだろう。主人公にとって男爵の迫害は、もはやある種の「情景」と化しており、そこに自らの責任が問われる余地はない。不正に一度は眼をつむったあげく、今度は観察者としての立場に甘んじて、悪人の処罰をあろうことか被害者の側に期待してしまうのだ。この不介入主義こそ彼の一貫した態度であって、憐みは常に無力なのである。

何より彼の情けなさを際立たせているのが、このシーンの結末であろう。打ちのめされて身動きできないシャルリュスを最後に救ったのはナポリ王妃であるが、彼女のあふれる善意と、王侯貴族への揺るぎない愛着は、傍観者にとどまった主人公の無益な憐憫と好対照をなす。王妃を勇気ある行動へとかり立てていたのは何より、「卑劣な侮辱をした輩」と、これに「毅然としてたちむかわなかった[21]」男爵への怒りであり、「その昔、ガエータで卑賤の

19）*LP*, t. III, p. 82.
20）*TR*, t. IV, p. 492.
21）*LP*, t. III, p. 824.

輩を威圧したことがある[22]」という女戦士の誇りなのであった。他方で主人公の場合には、これらの自尊心や正義への欲求、或いは、不正と戦おうとする意志が欠けているかわりに、憐みの心は失われずに済んだのである。むろん、これによって、ナポリ王妃の道徳的価値の優位性が証明されたわけではない。プルーストは、彼女の善意が「高貴な生まれの近親[23]」にしか向かわないゆえ、「いくぶんトーリー党を思わせる」排他的なものでしかなく、「ますます時代遅れ[24]」になっていることを指摘し忘れない。それに、彼女がシャルリュスを助けられたのは、置き忘れた扇を取りに戻ったからにすぎず、シャルリュスの救済はいわば偶然の産物であり、王妃の貴族的精神の勝利の必然性を証しだてるものではない。要するに結末はこうだ。弱者をいたわるはずの主人公の憐みは多くの弱点をはらみながらついに無力なままである一方、時にそれと対立する自尊心と貴族的差別主義が人を助けたのだ。しかし、それとて単なる運命の悪戯にすぎない。シャルリュスを救ったのは王妃の忘れもののおかげ、と言ったら皮肉に見すぎだろうか。

プルーストがこのシーンで行ったのは、憐みという感情が現実にどう経験され、どのような効果を発揮するのかを示すためのある種の実験であったようにみえる。憐みは、人間の本性であるゆえに本当は容易い善意の感情であるものの、平時は潜在したままわずかなあいだしか表出しない。それも、もともと対極にあるはずの卑劣、エゴイズム、あるいは自己防衛欲求に常に侵されつづけ、実際には卑俗な形態を身にまとう。しかも、憐みを感じる主体の個性や、置かれた状況に応じて、その現れ方はさまざまである。主人公の憐みと、ナポリ王妃のそれの相違が好例であろう。プルーストの小説は、純なる美徳を説くのではなく、美点のまわりにとりつく膨大な悪癖とともに、それを現実に即した生きた形で、しかもヴァリエーションに富んだ形で、提示してみせるのである。

---

22）*LP*, t. III, p. 825.
23）*LP*, t. III, p. 824.
24）*LP*, t. III, p. 825.

### 肥大する憐憫の残酷

プルーストの洞察は、憐みの本質そのものを根源的に問い直すところまで行き着く。語り手は、「ソドムとゴモラ」において、病魔にさいなまれる祖母の苦しみを想像しながら次のような考察を書きつける。

> 私は、（祖母の最後の日々の）苦しみを自ら味わいなおしながら、例のあの要素を加えてこれを膨張させていた。その要素とは、他人の苦しみ自体よりもなお耐え難く、私たちの残忍なる憐憫によって付け加わえられる要素である。愛する人の苦痛を再現しているだけだと思いながらも、私たちの憐憫はこの苦痛を肥大化させてしまうものなのだ。しかしおそらく、苦痛に耐える人が自分の苦痛に対して持つ意識よりも真に迫っていると言えるのは、この憐憫のほうなのかもしれない。当人たちの目には自分の人生の悲惨さが見えないものだが、憐憫のほうはというと、この悲惨を見つめ、これに絶望しているからである[25)]。

ここでは、苦痛を味わう受難者たちに対する憐憫の二つの面が指摘されている。一方は、憐憫の透視力である。苦しんでいる人はただ苦しみに耐えるしかないが、それを見つめる者は当人の置かれている状況の悲惨を思い知る。憐れむ者は、人生の実相を知り、絶望する者でもあるのだ。他方で、憐憫は、他者の苦痛の程度を過剰に見積もる傾向があるということをプルーストは指摘し忘れない。この場合、憐憫は、主人公がフランソワーズやアルベルチーヌに抱いていたのとは異なる別の様相を呈することになるだろう。それはもはや、他者理解とはならず、他者の苦痛を和らげる優しさや愛情でさえなくなる可能性があるからだ。

プルーストは、憐憫という言葉に対して「残忍」という形容詞を当てている。これは本来ならば形容矛盾というほかない表現である。「残忍」とは本来、プルースト自身も言うように、他者への無関心に端を発しており、他者

25）*SG*, t. III, p. 171–172.

に寛容になり理解を示す憐憫とは対極にあるはずだ。しかし第一に、他者の苦痛をおおげさに考えさせる憐憫は、憐憫を感じる人自身にとって残忍と言うべきではないだろうか。憐憫の情が他者への愛を強めるのに比例して、愛する者の苦痛を想像する辛さはさらに苛酷になるからだ。さらにこの種の憐憫は、憐れまれる側にとっても残忍になることがある。例えば、病に苦しむ祖母に接するフランソワーズの憐憫がその典型であろう。彼女は「つねに最悪のことを想定したがるある種の性癖」のために、心底祖母のことを愛していながらも、変わり果てた病人の姿に、「驚愕を遠慮なく表す不吉なまなざし[26)]」を注いではばからない。それに対して、語り手や彼の母は、「祖母はそれほど悪いわけでないと見てやるのが愛情[27)]」と考える。彼によれば、「戦争になると、自国を愛さない者は、国に悪態をつくことこそないが、敗戦を信じて国を憐み、事態を悲観視するものである」という法則は、私生活にも当てはまるという。この法則はまた、アルベルチーヌを保護者気取りの過剰な愛で包もうとするアンドレの心理にも当てはまる。アンドレは他人の不幸にはいつも同情を寄せる一方、幸福には不快感を示すことから、その本性は実は冷酷なのではあるまいかと語り手は疑う[28)]。むろん、フランソワーズにしろ、アンドレにしろ、彼女らの本性が善良であることを語り手は認めている。フランスワーズの残忍は「庶民にありがちな育ちの悪さ」に由来し、アンドレのそれは彼女特有の神経症[29)]、或いは、「すべての人を愛する心構えはあるものの、勝ち誇ったその人たちの姿を思い浮かべないこと[30)]」を必要条件とする精神面の欠点にすぎない。いずれにせよ、一過性の感情である憐憫が、過剰な想像力を発揮するとき、それは憐れまれる対象にとっても残忍たりえることを、プルーストはフランソワーズやアンドレの場合を例に言おうとしていたのではないだろうか。

---

26）*CG*, t. II, p. 615.
27）*CG*, t. II, p. 616.
28）*LP*, t. III, p. 568., *JFF*, t. II, p. 276.
29）*LP*, t. III, p. 129.
30）*AD*, t. IV, p. 183.

このようにプルーストは、憐憫とは他人の不幸を一方的に嘆き悲しむというなかば身勝手ともいえる反応であるがゆえに、他者が現に感じていることを理解するうえでは限界に突き当たらざるを得ず、ときにはそれと背反する残忍と一体ですらあることを暴いてみせるのだ。

## 3. 憐憫を超えて――卑怯、あるいは真の人間理解――

### 悪への共鳴

憐憫が本来的にはらむ限界と矛盾。このことを知ることは、憐憫とは異なる形での他者理解の可能性をひらくだろう。「ゲルマントのほう」で、サン＝ルーとともにラシェルの芝居を観にいく主人公は、彼女による新人女優いびりを目撃する。以下はそれに続く語り手の考察である。

> 私はこの事件のことを考えるのをやめようとしたが、それは大叔父が祖母をからかおうとして祖父にコニャックを飲ませるときに祖母の苦しみを考えまいとしたのと同様だった。人の意地悪を考えるのが、私にはあまりに辛いことだったからだ。しかしながら、不幸な人を憐れむことは、たぶんそれほど的を射たことではないのかもしれない。というのも私たちは、想像によってある苦痛がどういうものかを思い浮かべてしまうが、この苦痛と戦わざるを得ない不幸な当人にとっては、これに同情するなどという発想はあり得ないからだ。それと同じで、悪者の魂のなかの悪意にもおそらくは、想像するだに私たちの胸を痛くさせる、純粋な快楽のための残忍性などないのかもしれない。憎しみが意地の悪さを吹き込み、怒りがこれをより苛烈にするが、こんなことは到底楽しいはずのない活動である。［…］ラシェルはきっと、自分がしごいている女優は一顧だに値しないと考えているのか、ともかく、この女優に罵声を浴びせさせることで、自分自身はよき趣味の回復をはかり、出来損ないの同僚に教訓を与えているつもりになっているのだ[31]。

31）*CG*, t. II, p. 471.

コンブレーで祖母を放置した時以来自覚していた「卑怯」をなかば弁明しながら始まったこの考察は、動機はさておき、理屈としては説得的である。憐憫は想像力を頼りにしている以上、必然的に誤謬に陥り、残忍性さえ露わにすることがある。そうだとすれば反対に、迫害のなかにも悪意以外の何かが含まれている可能性がありはしないだろうか。例えばラシェルの場合、よりよい芝居を目指すプロ意識の高さであり、芸術の成功を最優先する職業倫理がそこにふくまれるかもしれない。となれば、悪人にも非道にも理はあるということになる。さらに同じ巻より別の一節を見てみよう。自宅周辺を散歩する主人公は人々の生活を観察するうち次のように述べる。

> 私が胸を痛めたのは、およそどの家庭にも不幸な人が住んでいることを知ったためである。こちらでは夫に裏切られて日夜泣いている妻がいるかと思えば、あちらではその逆のことが起きている。また別のところでは、働きづめの母親が飲んだくれの息子の暴力を受けながらも、隣近所に自分の苦難が知られないよう努めている。人類のまさに二人に一人は涙しているのである。このような人々のことを知り、あまりの腹立たしさを感じた私は、不貞を働いた夫や妻がいるとしてもそれは、当然の幸福が与えられず、自分の配偶者以外のあらゆる人に対しては魅力的にかつ誠実にふるまったからにすぎず、正しいのは彼らのほうなのではないかと考えた[32)]。

社会道徳の規範から言えば憎まれ、或いは、罰せられて然るべき不貞行為について一度は腹立たしさを感じたたものの、彼の思考はすぐに方向転換する。家庭の不幸の原因はむしろ、世間が被害者とみなすだろう者たちの側にあるかもしれないと思い立ち、一度生じた憐憫に留保をつける一方、不貞を働いた加害者が実は、当然の幸福が与えられなかった被害者であって、他人に対しては「魅力的かつ誠実」であったかもしれない可能性を想像する。このよ

32）*CG*, t. II, p. 667.

うな彼の考えは、大叔母の意地悪や、ラシェルの新人いびりを前にしたときの反応と同じく、他者の苦しみや不正を見てみぬふりする「卑怯」のためとも言える。「人類のまさに二人に一人は涙している」という現実に耐え切れず、その原因たりえる悪を正義の観点から見極める勇気が欠けているのだ。語り手の想像はここでも、主人公の卑怯を正当化するための弁明になっている。しかし卑怯であるからこそ彼は、憐憫による一面的かつ一時的、一方的な感情移入や、良識や正義による断罪を避け、次のような真理に基づく他者理解に至るのである。

> 私たちがはっきりと目にした邪悪な面はまた表に出てくるだろう。だが、人の魂というのはもっと豊かであって、多くの別の面も持っている。これらの面もまた同一の人間のうちに再び浮上してくるのだろうが、私たちは彼のかつてのあくどいやり口を見てしまったがために、その優しさをみとめることができないのだ[33]。

ところで、卑怯の自覚に伴うこのような洞察は彼にとって、自らの日常的な感情発生メカニズムについて反省を促す契機にもなるだろう。祖母や母の性質を受け継いだせいで悪人を裁けない彼は、同時に悪人をことあるごとに恨む人間でもある。そもそも、意地悪な人間に許しを与える「卑怯」をはじめておこなったとされる幼少期を振り返ってみても、祖母に嫌がらせをする大叔母を、当初彼は「ひっぱたいてやりたい」と思ったのであって、「人を恨めない」性質とは裏腹に、「発作的にカッとなる」という別の要素をきちんと持っているのだ。似たような例は枚挙にいとまがない。ロベールを安全な地域へ転任させるべくモンセルフイユ将軍に口利きしようとするパルム大公妃の計画をなんとしても阻もうとするゲルマント公爵夫人に対して、主人公は「憤然」とし[34]、サン＝トゥーヴェルト夫人の企画するガーデンパー

33）*LP*, t. III, p. 830.
34）*CG*, t. II, p. 804.

ティーをこき下ろすシャルリュスに対しても同様の怒りを禁じえない[35]。一夜をともに過ごそうという誘いを邪険に斥けるモレルの冷淡に打ちのめされたシャルリュスが偽りの決闘計画を練りあげるなか、それに付きそう主人公は男爵に「非常な憐れみ」を抱き、ヴァイオリニストには「憤慨」する。この怒りは、シャルリュスのメッセージを届けるためにモレルを訪れたときは「いっそう大きくなった」。庇護者の悲嘆など気にする様子も見せず、「土曜の夜、仕事のあとで」を口ずさんでいたからだ[36]。主人公は確かに、世間から教えられるような正義や道徳律に欠け、善と悪を見極める判断力すらないと告白している。しかし、小説を読めば誰しも善人や弱者に味方するのと軌を一にして迫害者が裁かれるのを望むように、内発的な憐憫の情が同時に悪への憎悪をかきたてるという普遍の心理現象が主人公のうちにも生起していることは間違いない。だとするなら、憐憫に歯止めをかけつつ悪にも心をひらかせる卑怯は、このような原初的心理法則の正当性を問い直すための一歩と言えないだろうか。

### 卑怯は書く力となる

しかし、主人公の卑怯は単なる卑怯なのだろうか。最後にこの点について付言し、本稿のまとめとしたい。第一に、「人を恨むことができず、誰であれ人を断罪することなどできない[37]」祖母や母の弱さと優しさを受け継いだために、彼の卑怯は、普通の卑怯には見られない他者への理解力を備えている。それ以上に考慮しなくてはならないのは、彼はまず小説家になる運命の青年であって、また、遺伝の影響を受けた生身の人間であるばかりでなく、語り手としての別の機能を担う人物でもあるということだ。悪意の裏にある諸要素への強い関心は、一般的な道徳律などでは認識しえない人間心理の重層性を文学創造によって解明・提示するうえで必要不可欠な、作家としての才能の一つではないだろうか。事実、語り手は、この種の人間心理探求は自

35）*SG*, t. III, p. 100.
36）*SG*, t. III, p. 452.
37）*JFF*, t. II, p. 105.

分が行うべき新たな研究課題なのではないかと述べている。シャルリュスの女中が日頃は数々の善行を行うことに励む徳の高い女性であるときかされていたのに、その裏では下品で悪意に満ちた隠語を使っていることを知った彼は、「これまでほとんど究明されてこなかった、一つの心のなかの善意と悪意との諸関係は、それがどんなに多様であろうとも、明確にできれば興味深いだろう[38)]」、と言っている。ここでは思いつきとして述べられたにすぎないこの計画が、語り手や小説家プルースト自身によって、作中のあらゆるところで実現していることは言うまでもない。一例をあげておけば、モンジューバンにおけるのぞき見シーンがもっとも分かりやすいだろう。絡み合う善と悪、人間心理の複雑さに敏感な語り手の分析能力が、先祖譲りの寛容さだけでは説明しきれない、彼独自の才能に根差していることが示唆されている。作曲家ヴァントゥイユ亡きあと、主人公の母は、「ヴァントゥイユ嬢が感じているはずの悲しみ、自分が父を殺したも同然だという後悔の混じったはるかにつらい悲しみ[39)]」を想って慄然とするが、そのせいでヴァントゥイユ嬢の秘められたレズビアニスムなど露ほども疑わない。それとは対照的に語り手は、同情すべき者への同情、憎むべき者への憎しみを乗り越えた冷静な透視能力と想像力とを発揮してみせる。それはしかし、ただの卑怯ゆえの悪の黙認ではなく、他者を深くみつめ、真相を語る使命を背負った文学者ならではの考察に行き着くのである。ヴァントゥイユ嬢のサディズムは純粋なる悪ではなく、父と祖母から継いだ「親切」と、「生来の美徳」、そして「純粋な心情」が根底にある。そのため、快楽に身をゆだねること自体が悪を具現することであるかのような錯覚に陥り、ついには性愛と悪を同一視し、非人間的サディズムに耽溺するようになった。ここまでの快楽への渇望はしかし、「残忍さの、恐ろしく、恒常的な形態」であるところの「他人の苦痛への無関心」から来ていると言うほかない[40)]。以上が語り手の分析結果の要点である。「一つの心の中なかの善意と悪意との諸関係」をヴァントゥイユ

38）*CG*, t. II, p. 585.
39）*DCS*, t. I, p. 163.
40）*DCS*, t. I, p. 163.

嬢独自の性格に即して解析し、さらには、「恒常的」な悪の側面を、つまりは人間精神の不変法則をヴァントゥイユ嬢のサディズムという個別具体例を用いて説明しているのだ。モンジューバンののぞき見は、サディズムとレズビアニズムの目撃という意味でアルベルチーヌとの恋愛を準備する伏線であるばかりではない。憐憫という感情を克服し、悪から目を背ける卑怯をも超越した先にある真の人間理解に、語り手のみが到達しうるということ、つまり、彼は作家に他ならないことを象徴的に予告しているのである。